

無印良品

無印良品

ニットデザイナー

村松啓市 のウール。

強くないひと、弱くないひと

2

他人に縛られず独自の視点を持ち、自らの裁量で思うまま、
軽やかに生きる方々に、力まず暮らすコツを聞いていきます。



村松啓市 むらまつ けいいち

1981年生まれ。文化服装学院ニットデザイン科卒業。

卒業後にイタリア、リネアピウグループに世界中からニットのスペシャリストを

集めたプロジェクト「MASTER LINEAPIU」に選ばれ留学。

帰国後、2004年からニットデザイナーとして活動を始める。

ファッションブランド「muuc」のデザイナーを務めながら、

ニットブランド「AND WOOL」のデザイナー兼ディレクターを務める。

<https://muuc.jp/>

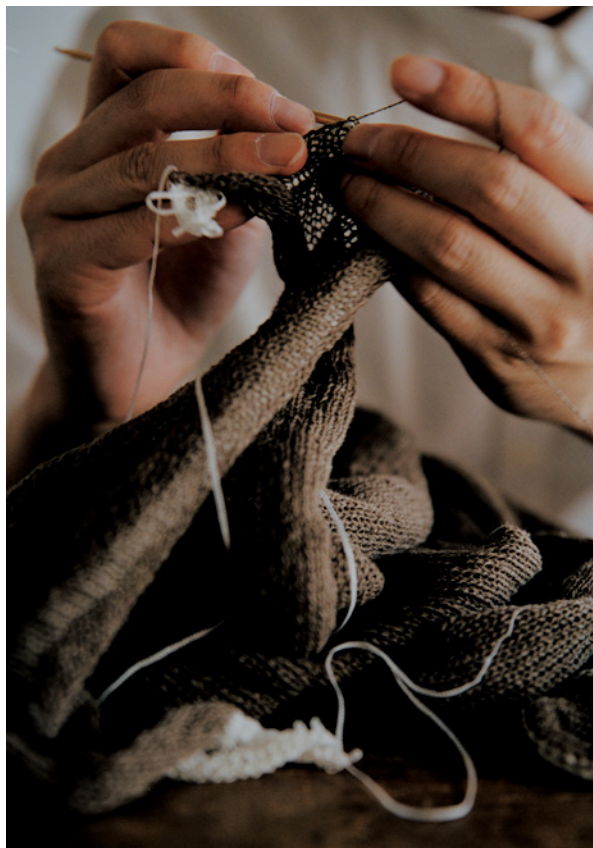
<https://www.andwool.com/>



天然のセーター。

ウールやヤクなどの獣毛は、自然の中で動物が生き抜くために身にまとった天然のセーターだ。この天然のセーターを太く硬い上毛でなく細く柔らかい下毛だけが生えるように改良されたメリノ種の羊は、生育される環境によって毛質を変えるという。例えば、イギリスの羊は、気温が低く草木も少ない山岳地帯で育つため、羊毛は丈夫で弾力が豊かになる。一方、温暖な気候のオーストラリアで育った羊の毛はふわふわで柔らかい。そのオーストラリアの羊もイギリスの牧場で生育すると、不思議なことに毛並みもごわごわとした手触りになると、ニットデザイナーの村松啓市さんは教えてくれた。そんな話を聞くと、わたしたちが着ているセーターのふわりと柔らかい着心地や肌触りから、草木が生い茂った大地で生き抜く動物たちの風景を思いめぐらずにはいられない。





毛玉を育てる。

太い毛糸から紡がれるニットの天敵といえば、毛玉。着れば着るほど増殖し、ひとつずつ取り払ってみるものの、こんなことを繰り返しているうちに、いつかセーターごと無くなってしまうのではないかとすら思う時もある。そんな疎ましい存在にも、ニッターの村松啓市さんは好意的で、意志を持って育てた毛玉と、手入れをサボってできた毛玉は違うのだという。毛玉を育てるとは、余分なものは摘み取り、毛糸と馴染むふっくらと成長したものを残すということ。村松さん曰く、化学繊維の毛糸からできる毛玉は少し無機質で個性がないが、個体差がある天然素材から編まれたニットにできる毛玉は愛らしいそうだ。いつのまにか居座る毛玉に対して見境なくむしり取ったりせず、庭づくりさながら、ていねいに剪定してみる。不均質をつくる存在を受け容れ、自分らしいニットと胸を張って装ってみるのも、わるくないかもしれない。





人を紡ぐ。

職人の高齢化や後継者不足によって、例外なく危機が迫っているニットの世界。そんな中、村松さんは地元静岡で雇用創出を伴うものづくりに取り組んでいる。持病や子育て、様々な理由で外で働きたくても働けない人が世の中に沢山いるが、ニットづくりは大型機械も要らないし、自宅の部屋ほどのスペースがあればできるため、村松さんは在宅ワーカーを募った。内職と聞くと低賃金労働と連想してしまいがちだが、上質なニットを品質相応の価格で市場に出すことで、在宅ワーカーにも適正な報酬を支払えるという。もちろん、品質担保のため、ニットの専門家である村松さんが、誰が編んでも問題が起きづらい衣服の構造や編み方、工程を設計した上でのこと。そして、この取り組みはニッターを育てることができる。「手仕事を教えることは大変」と喜々として話す表情は、糸を編むように人を紡ぐ楽しみに満ちている。